
ある日の午後

齋藤尚彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日の午後

【Nコード】

N2855Z

【作者名】

齋藤尚彦

【あらすじ】

意味もなければと書いてみました

「通り雨」

最近、くだらなさや寒気さを自分に感じ始めて何ヶ月か進み、年もう明けようとしている。

とてもじゃないけど、自分の望んでいた人生というものが結局なんなのかも思い出せなく、ただ漠然と過ぎていた最近……

工藤は今年初めてくだらないことをする決心を付けた。

僕は、路上で寝転がってみた。

いちどでいいからやってみたかった。

くだらないとは分かっているがらふと、この固まりのような一つの町の肌というものを感じてみたかった。

だれもない路上で、僕は寝ろがってみた。

よっていた訳ではない。

ただしてみたかった。

それは12月だったせいもあり、硬く……僕を何も考えずにただ、包み込む何かの腕のように感じた。

それだけなら良かった。僕はその固まりをただ踏みしめる毎日の通勤で、その町の土というコンクリートの歩道をただ無視していたの

に、今僕のことを包み込んでこの固まりという存在自体が、町だと言っことを今更ながらにただ悲痛とともに僕の心を突き刺した。

そして僕は、そのじりじりと、体温を奪っていく雨に濡れたジャンパーをただ無視している自分にやはりそこにもなにか、自分が感じずに、いつも気がつかずに、忘れているなにか大切な、僕を守っているもの事態を、粗末にしてきた事実に対して何かの代償をそろそろ払うのではと、密かな期待感と、そのほかの10割の恐怖感をただ感じていた。

喜びのなかにも常に持つ期待感のようなそのざわつきは僕を常に陥れるか救うかの瀬戸際を常に僕に迫ってこの何年間かが過ぎてきたように僕は大切な何かをなくしていたことに気がついた。

この虚無感と耐えきれない悲しみのなかで僕はそれを誰にも表現せずだた一人過ごしてきたが。

だれしも、そのような過去はもって生きていると思いつつ僕は常にそれをタンスの奥底に押し込んで生きてきた。

しかしたぶん僕のことを思っている人は今でそれに気がついていたのだろうと僕は今思う。

冷たい雨が僕をぬらすそれは僕に対する優しさなのに僕はそれを受け取れずただ拒絶していてそれを悲しく思う友達は、僕を守ろうと、ただ衣服になり僕を守ってきてくれた。

そして僕はその雨に無反応でいながら衣服たちは僕の代わりに雨に濡れていた。

ボロボロになって僕のことを守ってきたともは僕の代わりに・・・

依然と僕はそれを何かの哲学のせいにもするように何年も繰り返した。

それが本当に僕をむしばんできては僕はそれをまたダンスの奥底に放り込んでは無視していた。

たぶん・・・

たぶんと言つ言葉はたいてい当たるが。

ぼくは、情と言つものが一番の犯罪者にとっての、いいわけになつてきたように思えてくる要因だった。

結局僕はそれを路上に寝転がることで初めて雨に当たることによつて・・・

寒さを、味わえることによつてただ虚無感とともに友の死を思い出していた。

そして僕はいつか死んでいくだろう。

「指紋」

指紋がただ僕をさわっていた、自分がさわる前に指紋が僕をさわるといふこの事実をいつも僕は不思議に思っていた。

何かがさわる前にそれをカバーする何かが存在するという事実を僕は知らなかった。

それ自体がなんなのかを知る前にそれをカバーするものが、それをすべて特定する証拠やパスポート自体になり得ているというこの存在である指紋。

日本も確かにそうなのだろう。

日本の場合彼ら（日本人旅行者）が日本のすべてを物語ってしまう事実が僕はとつてもいやだった。

なぜこんな奴らと同じに見られてしまうのだ。

僕はそれを感じたのがニュースを見ていた昼のラーメンをたらふく食べている最中だった。

彼らの買い物で何を買おうかというその面を見ているその一瞬一瞬に何か自分の過去のその毒々しいやむような何か得体の知れないくだらない生き物が表情にありありと見受けられ僕はそいつ等を動物としかみれない存在だということに気がつきそれを満足したらただの同じ次元から1つ上にいるだけのバカにだけでしかなれないというそのことが僕をさらにもどかしく思えさせていた。

• まったく次元が低い。俺もこいつらも、そして、このニュースも・
• そしてこの人間という得体の知れないだまし合いのゲームを・・・

「暗い部屋で」

暗い僕のこの気持ちはどこまで落ちていくのか分からなかったが常に僕は一定の歯止めを持たなかった。

落ちるところまで好きなだけ落ちていった・・・

それをだれも阻止せず僕はただ、おもしろ半分に落ちる気持ちを味わっていた。

僕はある程度落ちたとき、ふと思った。

何を犠牲にしているのだろう。

それは僕自身か？

親か？

遺伝子か？

何の幸せも何の不幸も望まないただそれを失いたくないから？

そして僕は多くのものを失ってきたがそれを感じずにいた。

ぼくは一番大切なものをなんども失ってきては虚無感に浸ってきた。

しかし、もう終わりたくなってきた。

さようなら人生・・・

しかしついには僕は死ねなかった。

死というものの下なさにも飽きていた。

奴は俺から何もかもを奪い去っていく

彼は俺に力や憎しみ、虚無感からくるエネルギーを与えてくれた。

そしていつか俺自身がそこに行き着いたとき。

だれが俺のことで力を得るのだろうか？

悟りを得るのだろうか？

そんな輪廻はもういらぬ気がする。

「雪」

雪が降っていた。あの公園で、君は一人僕を待っていた。

僕はそれを何度もすっぱかしてきたのにそれに初めて気がついた振りをして突然、そのそぶりで彼女に近寄った。

アル？ずいぶん待ったよ・・・

マリは言った。

僕のことをいつもこの公園で待ち続けたマリは言った。

アルといった昔のこの公園のこのベンチ覚えてる？

突然のその素直な僕への心へのアクセスに僕は自分のその愚かさ
それが伴う無邪気さという・・・というより邪心故にこの愚かな言
葉をはいてしまった・・・

あるとき俺はおまえを嫌いだと思っていたんだ。

君ほどの女は知らない、君のような卑怯な女は・・・

俺はおまえなんか好きなんかじゃない・・・！

そしてそれから2年後僕の元から彼女は永遠に存在を消してしまっ
た。

アル・・・おまえは・・・おまえは・・・と自分自身を殺したくな
った。

殺せたのならそのときの知らせで僕は自分を殺していたかもしれな
い。

マリは自分自身で自分の命を絶つてしまっていた。

その事実を知ったのも愚かにも僕の親友からだった。

僕は自分を何度も呪ってはそして永遠にまたダンスにそれを丁寧に
ぶち込んだ。

そんな男が俺の中でいつも巣くっていた・・・

「一般の若者の心境」

若者がいるこの世代の中で僕は常に一般の一般人というこの存在を疎ましくただ抜きんでようとしていた。

それが常に普段自分を嫌う若者同士のくだらない鎖のようなものだった。

僕のいつもの思っただの気持ちの中で一番周りの醜態を憎んでしまふそのチェーンが僕はそのライバル心というものの自体のいやらしさとそのくだらなさに常にいらだちも誰しも隠しきれずにいると常に思っではいたが。ある男がこれを打開してくれた。

僕はそれを今でも友情とさえ思えたりもした。

その男は僕を意図も簡単に常識をねじ伏せるすべてを教えてくれたりもしたがそれが逆にくだらなかつた。

僕はいつものように、列車のホームにいたが、彼は僕と真向かいのホームにいた。

僕は彼を見受けるやいなや彼も僕を見受け、僕の元に彼は飛んできた。

そして隣にたち言った。

どうして、泣かないの？

？

僕は不思議に思った。

ばか、泣くかボケ！

突然僕は正直に口走っていた。

その男は言った。

ボケっていうなら君は正直だね・・・まだ。

だけど正直でもいいけど人になぜそんなにきつくいえてしまうのか僕には理解できないのに・・・

君は僕に簡単にボケって言うてしまっただものとてもその方法論を伝授してほしいよ。

僕はそのときは不思議だったけど、こと手の人間がこの世に存在することを僕は知っていた。

何というか、何とかかんとかと言う病気で、悪口を言えないどころか悪い気持ちを抱けない天使のような心を持ってしまっ病気で、それは染色体のどうたらこうたら突然変異で、そうなってしまう神様のいたずららしい。

しかし僕はそのもう一つの習性も知っていた。

それが故に本心からつき合える友達が一生できないという話だった。なぜなら周りに自分と同じような100%純粋な人間がいらないからだとか・・・

それを知ったのは彼が死ぬ間際だった。

2010年僕はその友達と知り合った。

彼は僕の為に盗みを働いた。

そこから彼とのつながりが生まれた。

僕はある日友達からマンガの話を聞かされていたがそのときからかいつもかかれず僕はマンガの話についていけないでいた。

それを知っていた友達達はわざとそれを使って僕と遊んでいる間マンガの話ばかりしていた。

僕はそれを何でもはなせるその友達には話した。

そいつは肌がとても透き通るほど白く目のきれいなまるで見ていてだれも彼も彼を好きにならない人はいないほどの変わっているとかいえないほどのかわいらしい男子だった。

ぼくは反面彼を毛嫌いしていたのはそのこともあってだったが彼は僕に言った。

そんなの何で気にするのか分からないな・・・

でも悲しいんだね・・・

僕がどうにか変わってあげられたらいいのだけど・・・

次の日は山ほどのマンガを抱えて僕を驚かした。

これ全部よみなよ・・・そうすれば仲良くなれるんでしょ！

一緒に僕も読むよ！

そうして何日かが過ぎて彼はある時学校に来なくなって僕は彼の家に行ってみた。

彼はとてもふつうの家に住んでいた。

しかし、違和感と言えばふつう過ぎるということだった。

そのふつうすぎる家のふつうすぎる母親に案内されて僕は入っていた。

その部屋で彼は別途で眠っていた。

僕は彼を・・・

ふと思った。

俺は何で気がつかなかったんだ・・・

彼を陥れてしまっていた。

そうだった。

そのけなげな友達は、僕のために万引きをしてマンガを何冊も本やから盗んでいたのだった。

愚かにも神様は彼に犯罪という意識を1つも持たせはしなかったの

だった。

彼は友を救う為にその手を犯罪に染めてしまっていたのだった。

そして僕は僕をのろいはじめた。

そして彼を僕は・・・

好きになってしまっていた。

・・・がその純粋な小鳥のようなその友達は、好きと言う感情もまた持たずにいた。

それを理解してはいなかった。

あまりにも正しいが故に・・・

それは個人的な好き嫌いの問題ではなかった。

遙かに遠問い僕には理解できない意識的な存在と彼はすでに同化していた。

それを僕は今でも知ることが出来ずにいる。

しかし僕は彼を無理矢理自分のものにしたかった。

僕は彼を身も心も自分のものとせずにはその欲望をかき消せずにはい

た。
僕は彼の元にいつも通うようになった。

それから彼の家に初めて訪ねにいった時のその寝顔とどうにも出来ない彼を抱きたいと願うその欲望を僕は忘れることさえ願っては常に大事にしまっていた。

それに気がついていつも赤面しているその自分を逆に呪っていた。

そんなのあり得ん！

奴は俺にとってまやかしにしか過ぎない！

そうして彼をはめたりしてはその逆の心自体に欲望のはけ口を求めては失敗していた。

彼はいつしか僕を理解出来ずにいるようになっていた。

僕は彼を無理矢理親友にしていた。

彼はかごの中の小鳥だった。

そして、ある夏海に行った。

僕は彼を目当てにしていたのに彼は一つの男と言つものだといつことを気がつかせることを僕に言った。

僕、なんか、むずむずすんだ。

えっ……

おれはびっくりした。

彼は男だと僕は認めていなかったからだった。

その次の現象を僕は見たとき彼を、世界一嫌いな醜い存在だと思っていた。

彼は一緒に止まったユースゲストハウスで、その行為をしていた。

そう自嘲している所を僕は見てしまったのだった。

そしてそれから僕は彼を人間として男として見るようになってしまった。

彼は、僕を友達として見てはいたが、彼のその行為が僕の彼への存在感に雲を掛けさせてしまっていた。

そして彼を最後に抱いたとき彼は・・・

もう、死んでいた後だった。

僕は彼を・・・殺していた・・・

あまりにもその存在の完璧性を保ちたくて・・・
大人になってほしくなくて・・・

僕は彼を無意識のうちに・・・首を絞めて殺していた・・・

その意識が僕の中で永遠にともにあることを願って・・・

しかし彼自身のその肉体はもう・・・冷たくなっていた・・・

僕はそれから1週間抜け殻とともにいた。

僕が彼の遺体とともに保護されたのは、それから後のことだった。

ホテルの追加料金を請求にきた支配人が僕らを見て警察を呼んだんだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2855z/>

ある日の午後

2011年12月10日01時54分発行